様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３５４０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３９０９

研究課題名（和文）文化に特有とされる心の伝播過程についての理論モデルの構築

研究課題名（英文）Development of a theoretical model of the transmission process of culture-specific psychology

研究代表者
橋本　博文（Hashimoto, Hirofumi）

安田女子大学・心理学部・講師

研究者番号：００７５９７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、文化に特有とされる心の発達的変化についての定量的データを蓄積し、その伝播過程に関する理論モデルを構築することにあった。この大枠の目的をかなえるために実施した個別研究の結果から、文化的独立性と文化的協調性を議論する際には選好と予想とを区別する必要があること、また年齢を重ねるにつれて日本人の文化的独立性が高まる一方で、文化的協調性は低くなること等が明らかにされた。これらの結果から、日本人（とくに若い世代）には、排除を回避するという意味での協調的な生き方を「せざるを得ない」状況が存在しており、こうした状況を理解することこそが文化心理学の研究知見の蓄積に有用となる可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
世界の人々と比較した場合の「日本人らしい」心のあり方の特徴を押さえておくことは、今後の多文化共生社会ないしグローバル化社会のあり方を問う上で有益である。本研究は、日本人に特徴的とされる心のあり方について、世代差に焦点を合わせつつ分析を試みたものであり、得られた研究成果の中でも、日本人（とりわけ若い世代）は、自らが理想としていない排除回避型の協調的な生き方をいわば「せざるを得ない」かたちで採用している事実を実証的に示している点などは、学術的にも、また実践的にもその意義は大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to accumulate quantitative data on the developmental changes in culture-specific psychology and establish a theoretical model to illustrate the transmission process. The results of several studies were analyzed to achieve this purpose. A survey was also conducted focusing on generational differences. I found that it is necessary to distinguish between preferences and expectations when the researchers discuss cultural independence and interdependence. Results of the survey also suggest that as Japanese people age, their scores on the cultural independence scale increase, while their scores on the cultural interdependence scale decrease. Based on these findings, I highlight the possibility that Japanese individuals, especially younger generations, cannot help but behave in a culturally interdependent way following a sense of rejection avoidance. Additionally, understanding this possibility might help in the accumulation of research findings in cultural psychology.

研究分野：社会心理学

キーワード：文化　相互独立性　相互協調性　文化的選好　文化的予想

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

過去四半世紀にわたり、文化心理学の領域において、価値や選好、動機づけといった人間の心に示される文化差が示されてきた。文化心理学における中心的な考え方によれば、特定の文化を生きる人たちは、文化内で共有されている認識枠組み（例えば、「相互独立－相互協調」に合致する認識枠組み）を用いて世界を理解し、そうした理解に基づいて行動することで、文化特定的な心の働きや行動の特性が生み出されるとされている。また文化心理学では、心と文化の相互構成関係が理論的中核に据えられており、心と文化との対応関係が強調されてきた（例えば、Markus & Kitayama, 1991）。こうした文化心理学的アプローチを踏まえつつ、申請者は、大学院進学後一貫して、文化心理学において広く受け入れられてきた心の文化差の理解に、社会的ニッチ構築という観点からの新たな理解の枠組みを提示してきた。申請者が現在その確立を目指している社会的ニッチ構築アプローチ（例えば、Hashimoto & Yamagishi, 2015; in press; Yamagishi & Hashimoto, 2016）とは、特定の文化において共有されている人間や社会についての信念体系が、人々の行動を規定する社会的誘因構造を生み出しているとするアプローチであり、認識枠組みそのものよりも、そうした枠組みや信念を社会的適応の道具として用いて行動する結果として生み出される、広い意味での誘因構造に着目するものである。

社会的ニッチ構築アプローチの概要は、文化内で共有されている信念体系が、それ自身を適応的にする社会的なニッチを形成するという点にある。この点を比較制度経済学の中心的研究者である青木（2001）は、「自己維持的な共有信念体系」として「制度」を定義することで表現している。人間や社会についての人々に共有された信念体系は、人々の行動によって集合的に生み出される「文化」を理解する上で鍵となる概念であり、したがって青木による制度の定義は、文化に関心を寄せる心理学者にとっての「文化」の内容と重なる部分が大きい。しかし、これまでのところ、心理学の中でもとくに文化心理学における標準的アプローチでは、文化を生きる個々人に内面化されるような価値や選好（以下、文化的選好）が「自己再生的」に生成され維持される――すなわち、個人を超えたアーティファクトとしての認識枠組みが、当該文化を生きる人々の文化的選好を育み、また世代を超えて再生産されていく（例えば、Kim & Markus, 1999 ; Kitayama, et al., 2009）――と理解されてきた。

２．研究の目的

本申請研究の大枠の目的は、「１．研究開始当初の背景」にて整理したように、これまで「自己再生的」に捉えられてきた心と文化の関係を、青木による制度の概念を援用するかたちで「自己維持的」に捉え直す――すなわち、特定の文化において人々に共有された信念体系に基づいて他者の反応を予想し、さらに、その予想に従うかたちで特定の行動を採用しあうことで文化特定的行動を採用する際の誘因構造（ある特定の行動に対して生じる他者の反応群）が生み出され、その結果として文化的予想と適応行動とが自己維持的に生成され維持される（そして、そうした再帰的な過程を通じて集合的にマクロパタンとしての社会的ニッチ（≒「文化」）が生成され維持される）過程を想定する――ことで、心や行動の文化差を理解するための新たな理論モデルを提示することにある。とりわけ本申請研究においては、まず、従来の研究において主たる分析対象とされてきた文化的選好（文化を生きる上で内面化される心の性質群）と文化的予想（自分にとって有利な反応を他者から引き出す文化的信念群）をまず明確に区別する。そして、社会・文化差のみならず「世代差」を分析の俎上に同時に乗せるかたちで、心と文化の相互構築過程を分析し、その分析を踏まえた上で、文化特定的な心の伝播についての従来とは異なる新たな理論モデルの構築を目指す。

３．研究の方法

(1)　文化的選好群または文化的予想群の存在を確認するための社会間比較調査を実施する。特定の文化を生きる個々人が有する文化的選好を、従来の（比較）文化心理学において開発されてきた尺度を用いて測定するとともに、社会的ニッチ構築アプローチに基づく理解において重要となる文化的予想――すなわち、当該の社会環境において、適応上有利となる反応を他者から引き出す行動についての予想を可能にする信念群――についても測定し、両者の重要性を比較する調査・実験も実施する。

(2)　社会差のみならず世代差についても分析を加えるため、ウェブ調査（幅広い年齢層を対象とした調査を行い、世代差を浮かび上がらせることを目的とする）や、親子を対象とする調査にも着手する。文化心理学における標準的な想定に基づけば、文化に特有とされる心理・行動傾向は年齢を重ねるにつれて次第に身につくようになると考えることができる（Kitayama, et al., 2009）が、本申請研究では、そうした標準的想定の妥当性に

ついても検討する。

4．研究成果

(1)　文化的自己観の年齢差：年齢を重ねるにつれて文化的独立性（自己表現の独立性）尺度の得点が高くなり、また文化的協調性（排除回避の協調性）尺度の得点が低くなること、さらには、年齢とともに「文化的選好と文化的信念の乖離」が小さくなっていくことを明らかにした（図 1）。文化的選好には年齢との相関が示されず、日本人の間では文化的独立性が好まれる傾向にあることを考慮すれば、ここでの分析結果からは、日本人（とくに若い世代）は理想とする独立的な生き方ではなく、排除を回避するという意味での協調的な生き方を「せざるを得ない」状況に身を置いているとの解釈も可能である。加えて、ここでの分析結果に対しては、従来の文化的自己観に関する議論、すなわち、文化的信念が世代から世代へと受け継がれるという議論とは異なる観点からの説明を要するものであり、その意味において、文化心理学研究においても一定の意義を有する結果である。これらの結果を報告した論文は、Frontiers in Psychology 誌に掲載された。

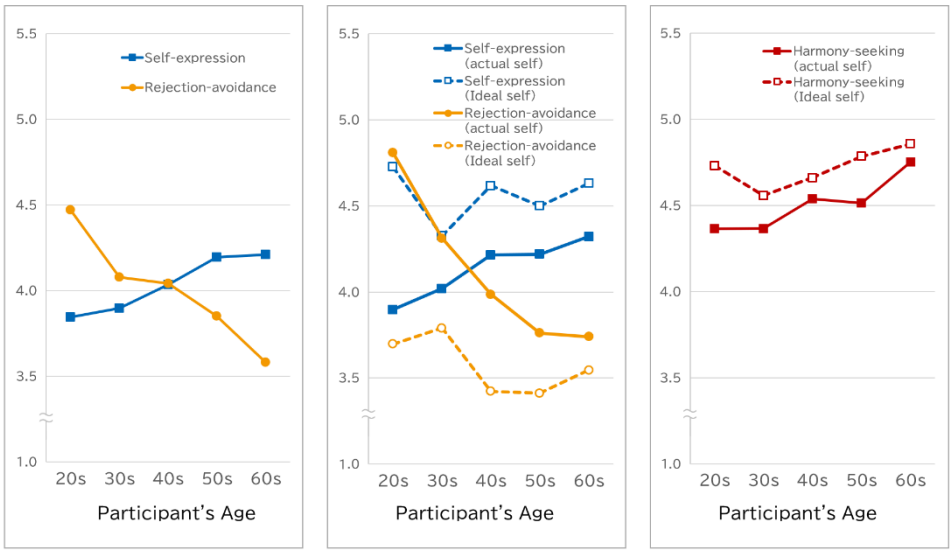

図 1　文化的独立性（青）と文化的協調性（オレンジ・赤）の年齢差

(2)　文化的選好と文化的予想の区別：文化的選好と文化的予想とを明確に区別するための社会心理学実験を行い、分析結果に基づいて文化的予想群の重要性を指摘した。より具体的には、日本を含む東アジアの人たちに特徴的であると議論されてきた「相互協調性」が、日本人個々人の選好の反映ではなく、あくまで他者一般に関する予想として、また公的な状況における他者への表明行動として示されるという事実を明確にした（図 2）。この事実は、申請者らがこれまで主張してきた社会的ニッチ構築アプローチにもとづく予測と合致するものである。これらの結果を報告した論文は、実験社会心理学研究に掲載された。

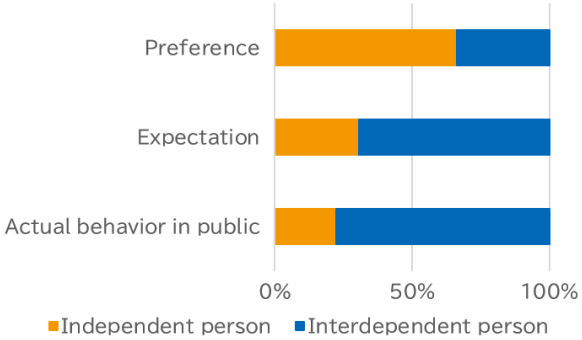

図 2　文化的選好と文化的予想の区別
（文化的独立性（青）と文化的協調性（オレンジ）の割合）

(3)　社会的ニッチ構築の視点にもとづく「協調性」の分析：文化的協調性の二側面を弁別し、

より大規模な比較文化研究に基づく分析を実施するために、米国をはじめ、アジアやヨーロッパの国々、そして南アフリカの国々を含む計 21 カ国、8072 名のデータの分析にも尽力した。分析対象者には、文化的自己観尺度（Hashimoto & Yamagishi, 2013）の短縮版――排除回避の協調性 3 項目（α=.67）と調和追求の協調性 3 項目（α=.64）――などに回答を求めており、マクロ指標として、1）個人主義－集団主義指標（individualism-collectivism; Hofstede, 1980）、2）法の支配指標（rule of law index; Agrast et al., 2013）、そして 3）身内集団主義指標（in-group collectivism; House et al., 2004）の三つを取り上げた分析結果が表 1 にまとめるとおりであった。社会レベルでの相関分析において、協調性の二側面のうち排除回避の協調性のみ、個人主義－集団主義（r = -0.79）と有意な相関が示される一方、調和追求の協調性は、そうした相関が示されないばかりか、（有意ではないものの）むしろ逆の正の相関（r = 0.22）が示された。排除回避の協調性得点は、法の支配指標（r= -0.59）や身内集団主義（r= 0.69）とも解釈可能な相関を示していた。

表 1　「二種類の協調性」の分析（国を単位とする相関）

	1	2	3	4
1. 個人主義－集団主義	——	——	——	——
2. 法の支配	0.59**	——	——	——
3. 身内集団主義	-0.77***	-0.72***	——	——
4. 調和追求	0.22	-0.24	-0.13	——
5. 排除回避	-0.79***	-0.59**	0.69**	-0.14

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Hirofumi Hashimoto	４．巻 12
２．論文標題 Cross-generational differences in independence and interdependence: Discrepancies between their actual and ideal selves in the Japanese cultural context	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Frontiers in Psychology	６．最初と最後の頁 676526
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.676526	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hirofumi Hashimoto	４．巻 59
２．論文標題 Interdependence in a Japanese cultural context: Distinguishing between preferences and expectations	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The Japanese Journal of Experimental Social Psychology	６．最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2130/jjesp.1815	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Eftychia Stamkou, Gerben A. van Kleef, Astrid C. Homan, Michele J. Gelfand, Fons J. R. van de Vijver, Marieke C. van Egmond, Diana Boer, Natasha Phiri, Nailah Ayub, Zoe Kinias, Katarzyna Cantarero, Dorit Efrat Treister, Ana Figueiredo, Hirofumi Hashimoto, Eva B. Hofmann, Renata P. Lima, I-Ching Lee	４．巻 45
２．論文標題 Cultural Collectivism and Tightness Moderate Responses to Norm Violators: Effects on Power Perception, Moral Emotions, and Leader Support	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Personality and Social Psychology Bulletin	６．最初と最後の頁 947-964
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0146167218802832	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本博文	４．巻 86
２．論文標題 日本人らしさを生み出す社会 ― 社会・文化心理学の視点から ―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 神奈川大学評論	６．最初と最後の頁 155-160.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Hirofumi Hashimoto
２．発表標題 Cross-generational differences in the contrast between self-expression and rejection avoidance
３．学会等名 Poster presented at the 21st annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 橋本博文・山岸俊男・Liu James
２．発表標題 適応論的視点にもとづく「協調性」の分析―社会レベルでの排除回避と調和追求および個人主義―集団主義の相関―
３．学会等名 日本社会心理学会第60回大会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 Hirofumi Hashimoto
２．発表標題 Low level of general trust among young Japanese is associated with their expectations about second chances.
３．学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第66回大会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 橋本博文
２．発表標題 独立性と協調性の世代差
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 Hirofumi Hashimoto, Toshio Yamagishi, Homero Gil de Zúñiga, James H Liu
２．発表標題 Understanding cultural interdependence from a social nicheconstruction view: Rejection avoidance, harmony seeking, and individualism-collectivism.
３．学会等名 Paper presented at the 13th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 Hirofumi Hashimoto
２．発表標題 I ’ m not confident of myself because I don ’ t have a second chance: Low self-esteem among young Japanese and socio-economic situations in which it is (thought of as) difficult to re-challenge.
３．学会等名 29th Annual Convention of Association for Psychological Science（国際学会）
４．発表年 2017年～2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関